

身体「運動」の語誌的研究 — 医学的分野を中心に —

南谷直利*, 北野与一**

A Study of Terminological History on Physical "Undō": In the Field of Medicine

Naotoshi Minamitani *, Yoichi Kitano **

Received July 15, 1997

I はじめに

われわれが平常行なっているスポーツ活動や体育活動では、それぞれの活動に特有の慣用語が使われ、時には、その活動以外の活動で使われない専門用語も使われる。これらの語彙は、それぞれ独自の語誌をもっている。

語彙の発達や変遷については、古くから国語学、あるいは言語学等の分野で研究が進められてきた。しかし、体育学の分野では、体育用語の語誌的研究は若干見られるものの、総合的かつ系統的な語誌の研究はいまだ皆無である。われわれは、各学問分野における従来の成果を十分に活用しながら、体育との係わりを視野に入れた語彙の史的研究を行ない、その語彙の諸相を多角的に明らかにしていくことが肝要と考える。こうした語誌の研究の積み上げは、その語彙を使う人たちの適切な活用を可能にし、その活動を歴史的な活動へと昇華して有効な成果を生むのを助けるであろう。

II 研究目的・方法

健康の維持・増進のための身体「運動」語彙の発達・変遷には、大略、医学的分野、教育分野及び軍事関係分野の三つの系譜が考えられる。その3系譜のうち、本稿では、特に医学（衛生）的分野に視点を置き、上記語彙の初出から定着に至るまでの発達・変遷過程を諸文献によって明らかにする。

* 法 学 部
Faculty of Law

** 元北陸大学教授
Prof. of Hokuriku University, ret.

Ⅲ 結果と考察

1. 「運動」語彙の原義と初出

『大漢和辞典』によれば、「運動」は、「めぐりうごく。はたらく。又、めぐらしうごかす。[新語, 慎微] 若_二湯武之君, 伊呂之臣_一, 因_二天時_一而行_レ罰, 順_二陰陽_一而運動。[後漢書, 梁統傳論] 夫宰相運_二動樞極_一, 感_二會天人_一。[董仲舒, 雨雹對] 運動抑揚, 更相動薄。」⁽¹⁾とある。また、『中文大辞典』には、「轉移也。[京房, 易傳] 積氣運動, 天地剖判, 成卦之義, 在於九二。[易緯, 乾坤鑿度上] 聖人日乾坤成, 氣風行, 天地運動, 由風氣成也。[莊子, 寓言注] 直自強陽, 運動相隨往來耳, 無意不可問也。[新語, 慎微] 因天時而行罰, 順陰陽而運動。」⁽²⁾とある。最近上しされた『字通』には、「めぐりうごく。[新語, 慎微] 天の時に因りて罰を行ひ, 陰陽に順_レすがひて運動す。」⁽³⁾と記されている。

以上から、「運動」語彙の原義は、「めぐりうごく」であり、その生まれは中国で、しかも漢代に誕生した語彙と考えられる。

なお、こうした用例は、わが国でも室町時代から見られた。耶蘇(ヤソ)会の宣教師数名の編集による『日葡辞書』(Vocabulario da Lingoa de lapam)には、「Vndô・ウンドウ(運動) Facobi, vgotu. (運び, 動く) 循環運動。例, Tenno vndô. (天の運動)」⁽⁴⁾とある。

2. 「運動」語彙の語釈

現在、「運動」語彙(以下、「運動」という。)には、概略以下のような語釈が見られる。

- ① 「めぐりうごく」, 「物体の位置が時間の経過につれて変化する」⁽⁵⁾。(以下, 「めぐり動く」という。)
- ② 「物体が動力によって動く状態」⁽⁶⁾, 「物理学名詞」⁽⁷⁾, 「力学」的運動⁽⁸⁾。(以下, 「力学的運動」という。)
- ③ 「化学変化・生物進化・社会発展などをも含めて, 物質の存在と不可分に結びついた変化一般」⁽⁹⁾, 「物事の状態が時とともに変わって行く」⁽¹⁰⁾。(以下, 「物事の変化」という。)
- ④ 「ある目的を達するために, いろいろな方面に働きかける」⁽¹¹⁾, 「或る事に奔走盡力する」⁽¹²⁾, 「在社会羣衆間, 散播思想, 宣傳主義, 以謀達其目的, 謂之運動, 如社会運動」⁽¹³⁾。(以下, 「社会的運動」という。)
- ⑤ 「ある目的のため, 軍隊や兵卒が移動する」⁽¹⁴⁾, 「军事用語, 移动前进。」⁽¹⁵⁾, 「教練」・「操練」・「訓練」⁽¹⁶⁾。(以下, 「軍隊式運動」という。)
- ⑥ 「生物体が能動的に起こす動き」⁽¹⁷⁾, 「生理学で, 一般に生体が能動的に動く現象。生体内で発生する生物学的エネルギーによって, 生体の全部または一部の位置を変える動き」⁽¹⁸⁾。(以下, 「生理的運動」という。)
- ⑦ 「養生の為體をうごかす」⁽¹⁹⁾, 「活潑肢體之動作, 意在使血脈流暢, 以増進身體發育者日運動」⁽²⁰⁾, 「身体を動かす」⁽²¹⁾, 「心身を鍛錬したり, 修練する目的で身体をいろいろに動かす」⁽²²⁾, 「主に身の回りの用事や家事的な活動領域(中略)における諸運動」⁽²³⁾。(以下, 身体「運動」という。)

以上のように、「運動」には、多様な語釈がある。これらの語釈のうち、「力学的運動」, 「物事の変化」, 「社会的運動」, 「軍隊式運動」, 「生理的運動」及び身体「運動」は、わが国におい

ては、いずれも近世、あるいは近代にその初出を求めることのできる語釈である。本稿では、身体「運動」を検討対象に論議を進めていきたい。

3. 身体「運動」の類語と初出

「運動」には多様な語釈が見られたが、身体「運動」もまた、視点や条件等の違いによって多様に類別することができる。本稿では、この身体「運動」を、「他動詞的用法の場合」⁽²⁴⁾で「自己目的性」⁽²⁵⁾を持ち、かつ「大筋肉運動を主体とした運動」ととらえて検討を加えていきたい。ただし、こうした条件の中にあっても、人間の身体「運動」の複雑さから、本稿の意図する身体「運動」と異なる身体「運動」も考えられることを付記しておかなければならない。

上記の条件を具備する身体「運動」には、概略以下のような「運動」がある。

ア. 日常生活上の身体「運動」

㊦ 身の回りの用事・家事としての諸活動

㊧ 生活のための収入を目的とした諸活動：労働⁽²⁶⁾

イ. 健康の維持・増進を目的とした身体「運動」

㊦ 日常生活の中で行なわれる諸活動：散歩、ジョギング、徒手的な体操、海水浴、レクリエーション活動等⁽²⁷⁾

㊧ 教育目的をもった諸活動：体育、体育的諸活動等⁽²⁸⁾

㊨ 鍛練・競争を目的とした諸活動：スポーツ、スポーツ的諸活動等⁽²⁹⁾

ウ. 文化としての芸術的表現を目的とした身体「運動」：能楽、舞踊等⁽³⁰⁾

本稿では、以上のうち、日常生活上の身体「運動」と健康の維持・増進を目的とした身体「運動」を中心に論議することとしたい。

(1) 身体「運動」の類語

はじめに、身体「運動」に係わる類語について検討する必要がある。それは、身体「運動」という語彙がある時期に現われることとなるが、それと係わる語彙の検討、つまり、身体「運動」の前身を求める観点からである。以下、語彙の初出年代に関係なく、順序不同で検討していきたい。

① 「うごく」, 「うごかす」, 「うごき」

『角川古語大辞典』⁽³¹⁾によれば、「うごく」と「うごき」には、「活動する」、「体を動かす」語意があるとされ、次のような用例と出典が示されている。

「物は少しおほゆれど、腰なんうこかれぬ」(竹取物語)、「そなたへまゐり来べけれど、うこきすべうもあらでなむ」(源氏物語〈夕霧〉)、「(オ産ガ)程ちかくなり給て、御うこきなども之あるまじきと、おほつかなくて」(夜の寝覚)

いずれの出典も平安時代の初期から後期にかけての文献であり、この時代に身体に係わった「うごく」及び「うごき」がすでに使用されていたのである。

なお、「うごく」の他動詞である「うごかす」は、上記の辞典を初め、『時代別国語大辞典』(上代編)⁽³²⁾でも記載されておらず、平安時代において身体に係わって使用されていなかったものと考えられる。

② 「はたらく」, 「はたらかす」, 「はたらき」

『角川古語大辞典』⁽³³⁾には、「はたらく」は、「体やその一部が動く」、「活動する」意がある

「不用乗馬若能步行^{ガルトキハ}勞動其脚氣自然漸老」とある。前者は「体を動かす」意であり、後者は「はたらく」意である。ここには、同語彙の異なる使い方がなされており、当初の姿をかい間見ることができる。

⑤ 「運轉」, 「運用」

「運轉」は、『時代別国語大辞典 室町時代編一』⁽⁴⁷⁾と『角川古語大辞典』⁽⁴⁸⁾に記載されているが、「運用」は、両者に記載されていない。こうした点から、「運轉」は、「運用」よりも古い語彙と考えられる。

『明治のことは辞典』⁽⁴⁹⁾は、「運轉」について「天体がめぐり運行する意味から、機械の運轉、身体を動かすこと、資本の運用へと変化」したと指摘し、『衛生新論』(緒方惟準, 1872)と『医事問答』(江馬元齡, 1875)の一節を引用している。また、惣郷正明は、『軍陣備要 救急摘方』(平野元良, 1853)の一節を引用し、「手や足の関節を動かすのに『運轉』という言葉が使われ」⁽⁵⁰⁾たことを報告している。

「運用」は、貝原益軒の『養生訓』(巻第二, 総論下)に使われている。すなわち、「家に居て、時々わが体力の辛苦せざる程の労働をなすべし、吾起居のいたつがはしきをくるしまず、室中の事、奴婢をつかはずして、しばしばみづからたちて我身を運用すべし。」⁽⁵¹⁾と。

さらに、櫻寧居士の『養性訣』には、「この臍輪以下丹田の地は、人身の正中にて、肢體を運用ところの樞紐なり(中略)身體を運轉べき大氣を、この中心の丹田より輸て、(後略)」⁽⁵²⁾と述べられており、「体を動かす」意で「運轉」と「運用」が使われている。

これらをまとめると、「体を動かす」語彙としての「運轉」と「運用」は、江戸時代中期頃から、主として医学的分野で使用されていった、比較的寿命の短い語彙であったと言える。

(2) 身体「運動」の初出

「うんどう(運動)」は、『時代別国語大辞典』の『上代編』には記載されていないが、『室町時代編一』には以下のように記されている。

「人や物が動きまわること。活動すること。『住車ハ不_二運動_一車也。・・・^{キヤウ}行車ハ運動スル車也』(六物図抄) 『知覚運動ハ生ゾ。知ハ寒キ熱キヲ知り、生ヲ悦死ヲ悪ガ知覚ゾ。運動ハ働クカタゾ。知覚ハ心ノ方、運動ハ身ノ方ゾ』(孟子抄+-)」⁽⁵³⁾

上記の『六物図抄』は、「自悦守懌講、芳卿光隣聞書」「永正五(1508)年跋」であり、『孟子抄』は、清原宣賢著で「永正一三(1516)年」の作である⁽⁵⁴⁾。いずれも抄物であり、室町時代における五山の僧や儒者の古典講釈の筆記録や注釈書である。こうした点では、この「運動」という語彙は、室町時代の僧や儒者間で慣用化していたものと考えられる。なお、上記『孟子抄+-』には、「天ノ三百六十メグルモ運動ゾ」⁽⁵⁵⁾と、原義である「めぐり動く」意でも使われている。

高野繁男は、『日葡辞書』を引用し、「わが国でも室町時代から」「めぐり動く」意での用例が見られると報告し、『身体運動』の意味になるのは(中略)明治六年ごろからのようであると指摘している⁽⁵⁶⁾。しかし、上記の引用文献も示すように、室町時代後期の1500年代初期には、「めぐり動く」意の「運動」も、「体を動かす」意の「運動」も、ほぼ同時期に使われていたのである。

「めぐり動く」意の「運動」から「体を動かす」意の「運動」に至るまでの変遷について概観してきたが、これまでの検討結果をまとめると、次のようになるであろう。

身体「運動」の前身とも言える語彙には、「うごく」「うごき」, 「はたらく」「はたらかす」「はたらき」, 「辛勞」, 「動作」, 「労働」等の語彙を挙げることで、これらの語彙が母胎となって「めぐり動く」意の「運動」が「体を動かす」意の「運動」へと発展していったのである。

4. 健康に係る身体「運動」の初出と定着

本稿の目的である「養生のため」「健康の維持・増進のため」「体を動かす」意をもつ「運動」という語彙は、いつ頃から使われたのか、また、それがどう普及し定着していったのか、本項で検討していきたい。

(1) 健康に係る身体「運動」の初出

わが国では、「養生」に係る衛生書は、古来先賢によって多々上しされた。それらの書は、経験によるものから中国や欧米諸国の影響を受けたものまで見られ、極めて通俗的なものから科学的なものまで多様であった。ここでそのすべてを検討することはできないが、ここでは、室町時代後期から江戸時代末期にかけて上しされた「養生書」について検討する。

健康に係る身体「運動」について、この語義をもつ内容の事例やこの語意をもつ「運動」という語彙の使用例を年代順に掲げてみよう。

「日出て動作し、日入て休息すべし」, 「春は夜臥て、早くおき、ひろく歩して、神氣を生ぜしむべし。」(曲直瀬玄朔 <1599>, 延壽撮要, 日本衛生文庫, 3 <6>, p.258, 259)

「春三月は陽氣が上りて萬物も生ずるほどに、(中略)朝から起きて廣き庭に出て歩み、只氣をのばし遊山玩水などして氣を悠長に持て」, 「手足をつかふ事、しづかにして汗の出ぬやうにはたらき」(名古屋玄醫 <1683>, 養生主論, 日本衛生文庫, 3 <5>, p.8, 10)

「身体は日々少しづつ労働すべし。久しく安坐すべからず。毎日飯後に、必ず庭圍の内、数百歩しづかに歩行すべし。雨中には室屋の内を、幾度も徐行すべし。如此、日々朝晩運動すれば、針・灸を用ひずして、飲食・氣血の滞なくして病なし。」(貝原益軒 <1713>, 養生訓, 石川謙校訂 <1987>, 養生訓・和俗童子訓, 岩波書店, p.31)

「老人は(中略)半時ばかり過て杖にたすけられて、小庭などを歩行して、食氣をめぐらし、極老の人(中略)人に手をひかれ座中を百歩ほどすべし、少し労働すべし」(香月牛山 <1716>, 老人養草, 3, 日本衛生文庫1 <2>, pp.62-63)

「搖動するものは陽氣つよしと心得べし」(小川顯道 <1773>, 養生囊, 上, 日本衛生文庫, 1 <1> p.50)

「躰ヲ動カシツカフコトヲ養性トス」(谷了閑 <1801>, 養生談, 日本衛生文庫, 2 <3>, p.59)

「勤=動作-不_レ可_レ好_レ安」(杉田玄伯 <1801>, 養生七不可, 日本衛生文庫, 1 <1>, p.7)

「人生養生の急務にして天の道也。ゆえに人各其職を勤て身体を運動する時は、能家を保ち生を安んじ其身壯健なること顯然たり。」(高野長英・岡研共訳 <1813頃>, 蘭説養生録, 2, <今村嘉雄《1967》, 十九世紀に於ける日本体育の研究, 不昧堂書店, p.694)

「手足ヲ動カシ一途ニ其職ニ心ヲ入レテ餘ノ忘念ナク勤ムルユヘ心氣勞セズ自然ト養生ノ道ニカナヒテ多ハ無病ナリ」, 「武藝ヲ學デ出精スレバ身體動搖シテ筋骨ノ養トナリ疾ヲ生セズ, 是文武ノ道皆養生トナルナリ」(中神琴溪 <1817>, 生々堂養生論, 日本衛生文庫, 3 <5>, p.104, 107)

「體は常に運動すべし、躁しく動作すべからず、坐臥久しければ氣血のめぐりを妨ぐ、坐臥常に足の指を屈伸して怠べからず、運動第一の要法なり」(田中雅樂郎 <1826>, 田子養生訣, 日本衛生文庫, 1 <1>, p.364)

「人身は運動に利あり、靜居に害有、運動すれば能く飲食を消化し血液を健運し筋骨を健固ならしむ(中略)力作の人は常に壯健にして富貴の人は恒に多病なるは全く運動の多少による者也、安坐して生活する人は常に務めて身體を運動し以て其害を防ぐべし」(陸舟庵 <1818~>, 養生訓, 上, 日本衛生文庫, 1 <1>, pp.189-190)

「醫説曰、偶食レ物、甚雖レ覺ニ體倦-, 無ニ輒就レ寝、可ニ運動徐行百餘歩-, 然後解レ帶鬆レ衣、(中略)宋程正敏曰、曩時は老人飯後必散歩、欲下搖ニ動其身-, 以鎖上レ食也」(伊東如雷 <1840>, 攝養茶話, 日本衛生文庫, 3 <5>, p.355)

「江戸は母子共に飲食厚美に過ぎ、(中略)然るに運動の機、不足なる故に、自然氣血手足肢末に循環するの力足らず、是只上部頭腦に逼進するゆゑなり。」(桑田立斎 <1853>, 愛育茶談, 日本衛生文庫, 1 <2>, pp.141-142)

「大氣浴場及び運動を論ず」, 「左の法則の無病健全を保つに要須なるを知るべし、即チ(中略)日々大氣中に運動すべし」(杉田擴玄端訳 <1867>, 健全學, 下 <6>, 致高館藏版, <雄松堂書店, 復刻版>, p.182, pp.222-223)

今村嘉雄は、「養生と身体活動の関係を説いたものは、益軒をもって嚆矢とするものではない」と報告している。養生と身体活動の関係を説いたものについては、今村の指摘のとおりであるが、「養生の為」「体を動かす」意での「運動」の使用は、現在のところ貝原益軒の『養生訓』が初めてではないかと考えられる。貝原益軒以後、このような意をもつ「運動」は、「動作」, 「つかふ」, 「労働」, 「搖動」, 「動搖」等の類語とともに「養生書」の中で使用されていた。上記の用例からも推知できるように、1800年代に入り、徐々にではあるが、使用例も多くなり、幕末から明治期にかけて定着傾向を強めていったのである。

(2) 健康に係る身体「運動」の定着—医学的分野を中心に—

初めに「定着」の概念を規定しておきたい。つまり、どのような時に「定着」したと考えるのかである。「言語」の定着の有無を確認する条件には、多様な条件があるだろうが、一般的には、少なくとも次のような条件が挙げられよう。

- ア 辞典類に掲載されること。
- イ 関係分野の法規に記載されること。
- ウ 公文書類, 教科書類, 新聞類に使用されること。
- エ 関係分野に係わる著作物(公刊物)に使用されること。

本稿では、上記の諸条件のうち、少なくとも複数以上の条件が満たされた時に「定着」したものと考えることとしたい。

どのような語彙であっても、その語彙の初出から定着までの過程においては、類語間の生き残りのための、あたかも「ふるい」に掛けるような選別事情が見られる。その結果、特定の分野・社会、あるいは特定の文化にとって有用で適切な表記と認められた語彙だけが生き残ることとなる。しかし、その語彙が選別され、定着したのか否かの判定は、容易ではない。こうしたことから、強いて上記のような条件のもとで検討を進めることとしたわけである。

健康に係る身体「運動」の定着までには、少なくとも三つの流れが見られた。それらは、医

学(衛生)的分野, 教育分野及び軍事関係分野での各流れである。本稿では, 先にも述べてきたが, 医学(衛生)的分野を中心に検討し, 他の流れは別稿で論じたい。

近世における養生論は, 19世紀に入ると, 儒学を基調とした養生論から西洋衛生学を基調とした養生論へと転換していく。先にも用例として挙げたが, 高野長英・岡研介共訳の『蘭説養生録』が西洋衛生学の翻訳の嚆矢とされている⁽⁵⁸⁾。その後, 文久年間から慶応年間にかけて, 杉田玄端訳『健全學』, 辻怒介抄訳『扶氏長生法』, 久我俊斎訳『三兵養生論』等が上しされる。また, 元治元(1864)年には, 松本良順・山内豊城共著『養生法』も出版される。これらについては, 今村嘉雄の詳細な研究報告がある⁽⁵⁹⁾。いずれの書も, 西洋養生法と係わって「運動」という語彙を使用し, 身体「運動」が健康の維持に必須であることを強調していた。

医学(衛生)的分野での幕末における西洋養生法の導入に伴う健康と身体「運動」との係わりは, 明治期に入って一層拡大・強化されていった。その拡大・強化は, 一般社会を対象とした衛生(個人)面において顕著に見られた。

明治10年代に入るまでに, 以下に掲げたような一般社会向きの衛生(養生)書⁽⁶⁰⁾が出版された。

明治5(1872)年: 緒方惟準纂輯『衛生新論』, 鈴木良輔『衛生新論』, 土岐頼徳纂輯『啓蒙養生訓』

明治6(1873)年: 横瀬文彦・阿部弘国訳『西洋養生論』

明治7(1874)年: 錦織精之進訳『百科全書 養生篇』, 文部省『養生編』

明治8(1875)年: 小林義直『養生試説』

明治9(1876)年: 浦谷義春『養生のすすめ』

以上の若干の著書について, 健康に係る身体「運動」に視点をおき, その内容を概観する。

緒方惟準纂輯『衛生新論』⁽⁶¹⁾は, 「晝間一回家外ニ徘徊シ或ハ開豁氣内ニテ努力スル^(こと)」緊要ナリ, また, 「體中の諸器ハ役セサレハ衰弱シ勞役スレハ強健ト爲ル」と述べ, 「空氣, 運動, 浴法」の三者の係わりで「身體ノ運動」の緊要性を強調していた。上記の引用文でも用いられているが, 「役」や「勞役」等の語彙が「運動」と併用されていた。なお, 「運動」は, 数か所にしか使用されていなかった。

同じ年に出版された土岐頼徳纂輯『啓蒙養生訓』⁽⁶²⁾(前編)は, ルビ付きで, 「運動ハ血行を^{はたらき}進運^{ちのめぐり}る事」の項を設け, 「筋肉の活動ハよく血行を進運ることなれば血行を盛にして肢體を強健にするに^{なつしよ}ハ日々正整よく筋肉を運動^にかすこと肝要なり」と述べている。ここでは, 「運動」を「はたらき」, 「はたらかす」意に使用し, 「活動」も同じ意で使用している。つまり, 先に述べた緒方の『衛生新論』とともに, この土岐の『啓蒙養生訓』(前篇)における「運動」という語彙の使用には, 類語との未分化がかい間見られるところから, 明治初年の両書の出版時頃までは, 「運動」はいまだ定着の途上にあつたものと考えられる。このことは, 明治7(1874)年に刊行された『啓蒙養生訓』(后篇, 卷之上)と「前篇」を比較したとき, 一層明らかとなる。

さて, その「后篇」では, 「運動」についてのルビに, また, 語意についても変化が見られた。「運動の事」の項で「それ人間の体に一日も缺べからざるものは空氣食物の外運動より大切なるものはなし凡体に強といふものなれば十分^{しうぶん}に物事をなして長壽を保つべからず体に強を^{つけ}付るには之を動かし働かすより外善き法あることなし」と論じられている。「前篇」での

「運動」が「運動」と改められ、「運動」実施の意義についても、「養生のため」というだけではなく、「体に強を付る」ためでもあると指摘し、拡大・深化させていた。なお、「后篇」には、「運動」と「体操」^{たいそう}、「運動」と「心(氣)」等の関連性についても論じられていた。以上のような「后篇」の表記や内容は、徐々に「運動」語彙の定着傾向が強められていたことを示していた。

横瀬文彦・阿部弘国共訳『西洋養生論』⁽⁶³⁾は、「運動ノ事」の項を設け、「運動」の意義を初め、必要性、一般的効果、方法論、種類と特殊効果等が科学的・体系的に論じていた。その主要な点を挙げると、次のとおりであった。

- ㉑ 「運動」を「労働」と明確に区別した。
- ㉒ 「運動」は、健康の保持増進と体力の向上に役立ち、精神的効果も大きいと指摘した。例えば、「運動」は、「心身ヲ慰勞快樂」する、「筋力ヲ固メ育成ヲ進」ませる、「筋骨ヲ健壯ニシ(中略)病害ヲ驅除ス」、「心膽ヲ廣量ニシ其意志ヲ安静ニスルノミナラス其軀命ヲシテ極メテ長久ニシ(後略)」と論じている。
- ㉓ 「運動」実施の基本的事項について、例えば、実施時の心のありようが効果に影響すること(「心ニ樂ミ氣ニ快キトキヲ以テ之ヲ行ヘハ其効ヲ得ルコト甚タ多シ」)、全身的な運動をすること(「平均ニ運動」する、「全体ヲ動カス」)、運動を毎日継続して行なうこと(「日常ノ運動」が「永久健康ニ欽クヘカラサル」こと)、性別や職業別の考慮、あるいは実施時期(朝晩、食前・後、季節)の考慮等、詳細に論じていた。
- ㉔ 近代的な各種の運動を紹介し、その効果と方法を解説していた。なお、「手業」の項で「体操」^{たいそう}に読み方と語意の2重ルビを付け、読者への便宜を図った。これは、啓蒙への配慮であろうが、語彙史の研究に示唆を与えるものとして注目すべきことであった。

わが国における百科全書出版の最初と言われている錦織精之進訳『百科全書 養生篇』⁽⁶⁴⁾は、文部省編『百科全書』93冊中の1冊である。ここには、「身体ノ運動」に係る養生法が論じられていた。その主要な点は、以下のとおりであった。

- ㉕ 「人体」は「働ク可キ性」をもち、「働ク」とときには、「筋ト精神トヲ」使わなければならない。
- ㉖ 「身体」は、使えば強くなり、使わなければ衰弱する。
- ㉗ 「身体ヲ使用」するに当たっては、「身体」が「健全ニシテ使用ニ堪フベキ」状態にあり、その状態によっては「漸ヲ以テ」行なうこと、「神経ノ激勵ニ由リテ運動ヲ促シ」「其達セントスル事ニ注意」し、「興」味を増すよう工夫すること、「身体ヲ使用」した後は、「食物ヲ以テ之ヲ補足」すること等が肝要であると指摘している。
- ㉘ 「運動」には、「自動、被動」の別があり、「自動体術」は「日ニ二時間」行なう必要がある。
- ㉙ 「熟眠スレバ其心ヲ快クシ且ツ其健康ヲ助クル」と、「心身ヲ休息ス可キ事」の重要性を指摘している。

明治初年に上しされた一般衛生(養生)に係る刊行物は、西洋医学を学んだ医師や英学を学んだ啓蒙思想家たちによるものであり、欧米諸国の生理・解剖書や衛生(養生)書等を抄訳したり、参考にしたりしたものが中心で、啓蒙を主目的にしたものであった。こうした啓蒙の成果は、次の報告からもうかがい知ることができる。明治初年「体術が教育の現場では普及が困

難であったのに比べ、養生法は日本では広く民間に広まっていたのでどちらかといえば、教師としては講義しやすかった⁶⁵⁾との大場一義の報告、あるいは明治9(1876)年3月初演の「歌舞伎・川中島東都錦絵(川中島一二幕)」の「『酒の匂ひと勢ひで』『呑まぬうちから』『満腹いたした』『どれ運動(ウンドウ)を』『いたさうか』」⁶⁶⁾(『日本国語大辞典』)との事例は、健康に係る身体「運動」という語彙や概念がかなり浸透し、定着傾向を強めていたことを示していた。

前述の横瀬・阿部共訳『西洋養生論』及び錦織訳『百科全書 養生篇』も示すように、健康と身体「運動」の係わりのとらえ方が近代的に多様化していった。つまり、「運動」概念の多様化が見られた。当初の病気にならないための・健康維持のための身体「運動」概念を基底に、「体」を鍛えるための身体「運動」概念、「心」に快楽を与えるための身体「運動」概念へと多義化した。なお、身体「運動」と係わって、食物や空気、休息や睡眠の重要性が指摘されるようになった。こうした身体「運動」概念の多義化、あるいは総合化といった発展的変容は、明治初年の啓蒙主義時代における衛生(養生)法に係る大きな特徴と言えよう。この衛生(養生)法と係わって、啓蒙主義時代には、もう一つの特徴が見られた。それは、「健康」の位置づけの問題であった。西洋の近代思想を特徴づける思潮に功利主義があるが、「この功利主義においては、健康、知識、富が何物にもまさる大切な宝とされ(西周・福沢諭吉らの説)、特に個人や国家社会の基盤として健康が第一義的なものとして考えられていた」⁶⁷⁾のである。

「健康」を個人や国家社会の基盤として第一義的にとらえる啓蒙思潮を背景に、「健康という概念が(中略)明治啓蒙思想を支える支柱として主知主義教育の内容とされ」⁶⁸⁾ようになる。つまり、「健康」問題は、民間の啓蒙面だけではなく、学校教育でも教科として取り上げられたのである。身体「運動」は、「健康」問題と絡んで一層その結び付きを強めていったのである。

明治10年代に入って上しされた石坂健壯『小學養生讀本』⁶⁹⁾、あるいは宇田川準一『小學生理訓蒙』⁷⁰⁾には、先に触れた『西洋養生論』や『百科全書 養生篇』とほとんど同じ内容の運動論が「健康」問題と絡んで展開されていた。また、明治14(1881)年の文部省小学教科書の調査によれば、『啓蒙養生訓』、『西洋養生論』及び『百科全書 養生篇』は、「優良教科書」として活用されていた⁷¹⁾。

健康に係る身体「運動」の定着について、明治10年代前半までを概観してきたが、明治期に入って、一般社会を対象とする衛生(養生)書が、啓蒙思想を背景にして次々と刊行された。これらの書のほとんどは、健康問題と絡んで身体「運動」問題を取り上げ、両者の係わりを強調していた。また一方では、明治10年代前半にはそれらの衛生(養生)書が学校教育にも活用された。こうした事象は、頭初に設定した「ウ」と「エ」の条件を満たすものであった。従って、健康に係る身体「運動」という語彙は、明治初年の啓蒙主義時代の末期頃から漸次その定着傾向を強め、遅くとも明治10年代の前半までには定着を終えたものと言える。

IV おわりに

健康に係る身体「運動」語彙の発達・変遷について、医学(衛生)的分野に視点を置き、この語彙の初出から定着までの過程を明らかにしてきたが、終わりに当たり、これまでの検討で得られた若干の知見を以下にまとめて本稿の結びとしたい。

1. 「運動」という語彙の原義は、「めぐりうごく」であり、この語彙は中国の漢代に誕生した語彙である。わが国では、室町時代からこの語彙の使用が見られた。
2. 「運動」という語彙には、「めぐり動く」を初め、「力学的運動」、「物事の変化」、「社会的運動」、「軍隊式運動」、「生理的運動」、「身体『運動』」等の多様な語釈が見られた。
3. 身体「運動」の類語に「うごく」「うごき」、「はたらく」「はたらかす」「はたらき」、「辛勞」、「動作」、「労働」があり、これらの語彙は、身体「運動」の前身とも言える語彙であった。

身体「運動」の初出は、室町時代の後期(1500年代初期)の抄物(例えば、『孟子抄』)と考えられる。

4. 「養生の為」「体を動かす」意での「運動」の使用の初めは、貝原益軒の『養生訓』と考えられる。こうした身体「運動」という語彙は、明治初年の啓蒙主義時代の末期頃から漸次その定着傾向を強め、明治10年代の前半には定着を終えたのである。

参考・引用文献

- (1) 諸橋轍次(1988), 大漢和辞典, 11, 大修館, p.111
- (2) 中文大辞典編纂委員会編(1974), 中文大辞典, 9, 普及本, 中國文化大學出版部, p.130
- (3) 白川静(1996), 字通, 平凡社, p.55
- (4) 土井忠生・森田武・長南実編訳(1980), 邦訳日葡辞書, 岩波書店, p.694
- (5) 久松潜一監・山田俊雄他編(1991), 新装改訂新潮国語辞典, 新潮社, p.200
- (6) 諸橋轍次(1988), 前掲書, 11, p.111
- (7) 中文大辞典編纂委員会編(1974), 前掲書, 9, p.130
- (8) 梅棹忠夫他編(1990), 日本語大辞典, 講談社, p.194
- (9) 新村出編(1984), 広辞苑, 第三版, 岩波書店, p.246
- (10) 尚学図書編(1990), 国語大辞典, 新装版, 小学館, p.272
- (11) 尚学図書編(1990), 前掲書, p.272
- (12) 諸橋轍次(1988), 前掲書, 11, p.111
- (13) 中文大辞典編纂委員会編(1974), 前掲書, 9, p.130
- (14) 尚学図書編(1990), 前掲書, p.272
- (15) 汉语大詞典編輯委員会汉语大詞典編纂处編(1992), 汉语大詞典, 10, 汉语大詞典出版社, p.1097
- (16) Lobscheid, W. (1866), An English and Chinese Dictionary, with the punti and mandarin pronunciation. HongKong, (英華字典), Part II, p.771
- (17) 松村明監・小学館『大辞泉』編集部編(1995), 大辞泉, 小学館, p.274
- (18) 梅棹忠夫他編(1990), 前掲書, p.194
- (19) 諸橋轍次(1988), 前掲書, 11, p.111
- (20) 中文大辞典編纂委員会編(1974), 前掲書, 9, p.130
- (21) 梅棹忠夫他編(1990), 前掲書, p.194
- (22) 今村嘉雄・宮畑虎彦編(1976), 新修体育大辞典, 不昧堂出版, p.125
- (23) 体育原理専門分科会編(1984), 体育原理 I, 運動の概念, 不昧堂出版, p.107
- (24) 高野繁男(1983), 「うんどう(運動)たいそう(体操)」, 佐藤喜代治編(1983), 講座日本語の語彙, 9, 語誌 I, 明治書院
- (25) 体育原理専門分科会編(1984), 前掲書, p.109
- (26) 体育原理専門分科会編(1984), 前掲書, pp.114-121
- (27) 金田一春彦・池田弥三郎編(1986), 学研国語大辞典, 机上版, 学習研究社, p.179
- (28) 体育原理専門分科会編(1984), 前掲書, pp.25-26
- (29) 久松潜一監・山田俊雄他編(1991), 前掲書, p.1050
- (30) 体育原理専門分科会編(1984), 前掲書, pp.121-128
- (31) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編(1982), 角川古語大辞典, 1, 角川書店, p.378
- (32) 上代語辞典編集委員会編(1989), 時代別国語大辞典, 上代編, 三省堂, pp.113-114
- (33) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編(1994), 前掲書, 4, p.1080
- (34) 佐藤喜代治編(1983), 講座日本語の語彙 II, 語誌 III, 明治書院, pp.150-151
- (35) 物集高見(1922), 廣文庫, 3, 廣文庫刊行會, p.762
- (36) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編(1987), 前掲書, 3, p.410

- (37) 日本大辞典刊行会編(1986), 日本国語大辞典, 縮刷版, 7, 小学館, p.1245
- (38) 日本大辞典刊行会編(1986), 前掲書, 7, p.1169
- (39) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編(1994), 前掲書, 4, p.611
- (40) 体育原理専門分科会編(1984), 前掲書, p.19
- (41) 曲直瀬玄朔(1599), 延寿撮要, 三宅秀・大沢謙二編(1979), 日本衛生文庫, 3(6), 日本図書センター, 復刻版, p.258
- (42) 日本大辞典刊行会編(1986), 前掲書, 10, p.1249
- (43) 上田万年他編(1985), 大字典, 特装版, 第22刷, 講談社, p.265
- (44) 上田万年他編(1985), 前掲書, p.149
- (45) 佐藤喜代治編(1983), 講座日本語の語彙 II, 語誌 III, p.148
- (46) 丹波康頼(984), 醫心方, 8, (財団法人日本古医学資料センター刊行<1973>), 醫心方, 講談社, <復刻版>, p.8; 25
- (47) 室町時代語辞典編集委員会編(1989), 時代別国語大辞典 室町時代編一, 三省堂, p.889
- (48) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編(1982), 前掲書, 1, p.484
- (49) 惣郷正明・飛田良文(1986), 明治のことは辞典, 東京堂出版, p.29
- (50) 惣郷正明(1988), 日本語開花物語, 朝日新聞社, p.9
- (51) 貝原益軒著・石川謙校訂(1987), 養生訓・和俗童子訓, 岩波書店, p.44
- (52) 櫻寧居士(1835), 養性訣, 上, (三宅秀・大沢謙二編<1979>), 日本衛生文庫, 日本図書センター, pp.154-155)
- (53) 室町時代語辞典編集委員会編(1989), 前掲書, p.889
- (54) 室町時代語辞典編集委員会編(1989), 前掲書, p.1254, 1256
- (55) 室町時代語辞典編集委員会編(1989), 前掲書, p.889
- (56) 高野繁男(1983), 前掲論文, 前掲書, p.101
- (57) 今村嘉雄(1967), 十九世紀に於ける日本体育の研究, 不昧堂書店, p.658
- (58) 今村嘉雄(1967), 前掲書, p.688
- (59) 今村嘉雄(1967), 前掲書, pp.688-712
- (60) 今村嘉雄(1967), 前掲書, pp.712-713
- (61) 緒方惟準纂輯(1872), 衛生新論, 下, 適々斎, pp.1-18(岸野雄三監・吉原瑛解説<1983>), 近代体育文献集成, 24, 日本図書センター)
- (62) 土岐頼徳纂輯(1872, 1874), 啓蒙養生訓, 前篇, 3, p.6, 后篇, 上, pp.25-33(岸野雄三監・吉原瑛解説<1983>), 前掲書, 24)
- (63) 横瀬文彦・阿部弘国共訳(1873), 西洋養生論, 下, pp.3-12(岸野雄三監・吉原瑛解説<1983>), 前掲書, 25)
- (64) 錦織精之進訳(1874), 百科全書 養生篇, 上, pp.34-48, 下, pp.1-6(岸野雄三監・吉原瑛解説<1983>), 前掲書, 25)
- (65) 吉原瑛(1983), 「保健・衛生編解説」, 岸野雄三監・大場一義・吉原瑛解説(1983), 近代体育文献集成, 第II期, 別冊, 解説編, 日本図書センター, p.55
- (66) 日本大辞典刊行会編(1986), 前掲書, 2, p.118
- (67) 吉原瑛(1983), 前掲論文, 前掲書, pp.43-44
- (68) 吉原瑛(1983), 前掲論文, 前掲書, p.44
- (69) 石坂健壯(1879), 小學養生讀本, 柴原宗助・大野木市兵衛, pp.18-23(岸野雄三監・吉原瑛解説<1983>), 前掲書, 26)
- (70) 宇田川準一(1881), 小學生理訓蒙, 上, 同盟舎, pp.8-12(岸野雄三監・吉原瑛解説<1983>), 前掲書, 26)
- (71) 吉原瑛(1983), 前掲論文, 前掲書, p.51